九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「學士會」会報に、出会いと交友を ： 追悼大林宣彦監督と尾道（下）： 哲学者荒木正見さん執筆

幾野, 伝

https://hdl.handle.net/2324/4371086

出版情報：尾道新聞, pp.2-2, 2020-02-03. 尾道新聞社
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

「學士會」会報に、出会いと交友を

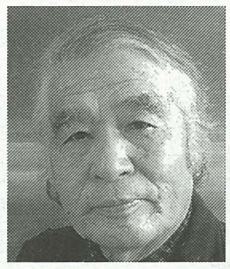
追悼 大林宣彦監督と尾道(下)

哲学者 荒木正見さん執筆

【2日付け続報】哲学者で元九州大学哲学会会長、荒木正見さん(福岡市)が一般社団法人學士會(東京)の会報に執筆した「追悼 大林宣彦監督と尾道」の後半を紹介します。荒木さんは監督との交友から、「懐旧というだけで映画の中のレトロな光景に溺れてしまってはならないことを教えて下さった」と振り返り、「永遠の芸術の中で、そして宇宙のそこかしこから、いつまでも私たちを励ましてくださることを信じて、私たちの未来を豊かに創っていかなければ」と結んでいます。

[紙面担当・幾野伝]

大林監督の生家が建つ土堂・千光寺道の登山口

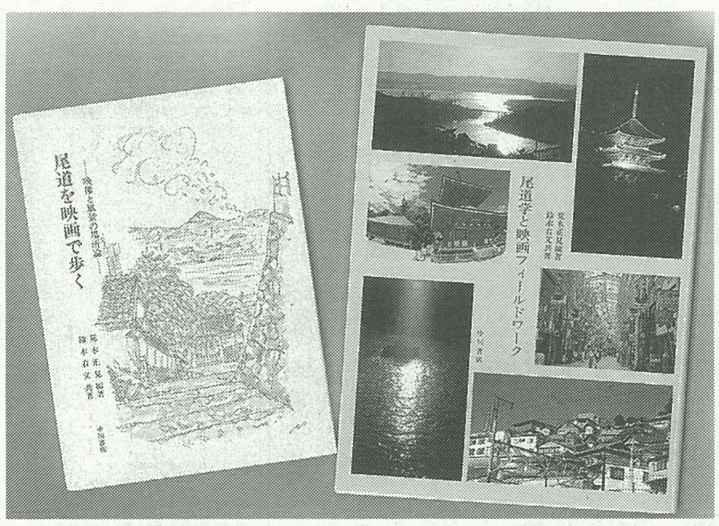


初めての商業映画『HOUSE ハウス』(一九七七年)以来、大林監督は非現実なストーリーに人生や社会の深いテーマを重ねる手法をしばしば用いられた。その劇的な契機になったのはやはり『転校生』(一九八二年)だといえよう。尾道・御袖天満宮の石段を少年少女が絡み合って転落して気づいてみたら身体が入れ替わっていたという設定と、入れ替わったからこそお互いを深く知り愛し始めるというテーマもさることながら、やはり尾道三部作といわれるその第一作のこの映画で歴史ある尾道を再び注目の場所に押し上げた功績は大きい。

そのことを少し異なった角度からお尋ねしたことがある。

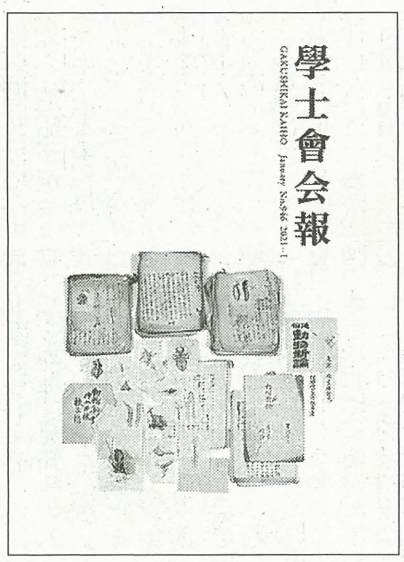
今日、千光寺山の斜面に典型的に見られるレトロな住宅地は明治時代以降の近代化に従って広がっていったものである。江戸時代までは、今日の山陽本線のすぐ上の標高に線上に並ぶ社寺の神秘的な領域として、山には一般家屋は建てられなかったという。このことを頭に置きながら、監督に、「映画にレトロな尾道を描かれるのですから、この風景よ、いつまでも、でしょうか。」とお尋ねしたところ、「私は、尾道の人々が快適に暮らせるようになるのなら、この斜面がマンション街になっても良いと思っていますよ。」とお答えが返ってきた。たしかに今のレトロな風景もかつてそうして出来たもの、と振り返る。

そしてさらにお尋ねしたのは時間の問題だった。過去現在未来が融合するいくつかの映画に尾道が存在することについて、「時間には客観的外的なクロノスという時間と、主観的内的なカイロスという時間とがありますが、やはり映画の中の尾道はカイロスに相当するのでしょうね。」とお尋ねすると、「それはその通りで、尾道は自分が親しんだところなので、映画のキャンバスに相応しい地形と風景を持っていて、ロケハンにしても自分の思い出と重ねやすいと思いますが、尾道で培われた原光景を普遍的に他の場所でも追及してみたいと思います。」まさに、それこそが大林監督のカイロスであった。



荒木さん共著の「尾道を映画で歩く」(95年)と「尾道学と映画フィールドワーク」(2003年)

監督はさらに付け加えて「未来は変えられるけど、過去は変えられませんね。」とおっしゃった。「えっ。」と不思議な思いをしたものだが、それは確かに重いことで、懐旧というだけで映画の中のレトロな光景に溺れてしまってはならないことを教えて下さったのだと気づいた。そして、それは『海辺の映画館―キネマの玉手箱』で、過去の戦争の時代に紛れ込んだ現代の青年たちがいくら奮闘しても着々と戦争は歴史通りに悲劇に向かって突き進むことに表現されている。



今回、荒木さんが追悼文を執筆した學士會会報

贈られた本の「映画とはフィロソフィー」という副題の「フィロソフィー」は、哲学研究者の視点からいえば存在論という狭い哲学ではなく、倫理学や論理学、心理学などを総合的に含んだ古代ギリシア的な「愛知(ピロソピア)」と理解できる。それゆえに、個人の総合的な生き様や世界の在り方などがテーマになる。

『野ゆき山ゆき海べゆき』(一九八六年)のラストにただ無音で原子雲が立ち上がるのは衝撃的だったし、『海辺の映画館―キネマの玉手箱』はまさに戦争の悲劇を訴えて平和を希求する映画であるが、大林監督の場合、原爆に対しては特別の思いがあることを伺ったことがある。

監督のご実家は、海岸の通りから千光寺山に上る急坂の千光寺道の登り口西、山腹を走る山陽本線の線路に接した石垣のすぐ上だが、ある時、「好奇心旺盛な子供のころ線路で遊んだことはなかったでしょうか。」とお尋ねしたところ、暗い顔をされた。そして、「尾道というところは広島で原爆にあった人が逃げてきて線路ぎわで斃れてしまうところなのです。」とおっしゃった。そのころ監督は小学校低学年くらいだったはずと思いながら、ルネ・クレマン監督の一九五二年の名画にかこつけて「もしかして、禁じられた遊び、をされましたか?」とお尋ねすると、「はい。」とはっきり答えられてしばらく沈黙された。体験されたその原点を映画に昇華されていたのかと感銘した。

大林宣彦監督が、永遠の芸術の中で、そして宇宙のそこかしこから、いつまでも私たちを励ましてくださることを信じて、私たちの未来を豊かに創っていかなければと誓う。

(おわり)